

ウィリアム・L・ギャリソンとアメリカ植民協会

奴隷制即時廃止主義への転換

竹本友子

I

アメリカ合衆国の奴隷制反対運動におけるギャリソン (William Lloyd Garrison) の役割に対する評価は、当時においてもさまざまであったし、また、今日に至るまで研究者の間でも分裂が見られる。しかし、アメリカ植民協会を徹底的に批判し粉砕した彼の功績については、異議をさしはさむ者はいないであろう。

一八三一年一月、*The Liberator* を発刊したギャリソンは、約一年後、ニューヨークランド奴隷制反対協会を設立し、アボリションニストの先頭に立って華々しい活動を展開していたが、この頃、ヘンリー・ベンソン (Henry E. Benson) 宛ての手紙の中で次のように述べている。

「植民 (colonization) 主義から奴隷制廃止 (abolition) 主義への転向は、あらゆるところで急速に増えています。」

ウィリアム・L・ギャリソンとアメリカ植民協会 (竹本)

私たちは大いに喜んでしかるべきです。なぜなら、私は植民協会の打倒が、奴隷制度そのものの打倒にほかならないと考えているからです。この両者は、立つ時も倒れる時も一緒なのです。⁽²⁾

ところで植民協会という組織は、正式名称を「合衆国の有色自由人を植民させるためのアメリカ協会」(American Society for Colonizing the Free People of Colour of the United States) とし、⁽³⁾ その名が示すとおり、合衆国のフリー・ニグロを国外へ移送し植民させることを目的として、一八一六年末、首都ワシントンに設立されたものである。⁽³⁾ この組織は、一八世紀末から、九世紀初頭にかけてのフリー・ニグロの急激な増加を背景に、顕在化⁽⁴⁾ したものであった人種問題のひとつの解決策として、当初は広範な支持を得た。しかしながら植民協会は、活動目的をフリー・ニグロの植民という一点に絞り、奴隷制度の是非について

は一切触れないという態度を公式のものとして打ちだし、奴隷制問題に関して終始曖昧な立場をとり続けたために、支持者の中に奴隷所有者も奴隷制反対論者も同時に含むという奇妙な組織となった。同協会は一八二二年、リベリアに植民地を建設し、一九世紀中におよそ一萬五〇〇〇人の黒人を送りこんでいる。しかし一八三〇年代にはいり、アポリシヨニストの抬頭とともに、植民協会が人種的偏見に満ちたものであり、また奴隷所有者を利するものであること等を攻撃されるようになる。同協会は、当初の奴隷制問題には不干渉という方針を貫いたために、そうした批判に対して効果的に答えることができず、理論的・倫理的破綻をあらわにしていく。そして一八三〇年代中頃から財政危機も重なって、同協会は急速に衰退していくのである。

このように、植民協会衰退の契機となったのは、ギャリソンを筆頭とするアポリシヨニストの厳しい批判であったが、この植民協会派とアポリシヨニストとの対立を、初めから相容れないもの同士の間隙と考えるのは早計である。先にあげたギャリソンの言葉からもわかるように、アポリシヨニストの多くはもとも植民協会の支持者であり、協会との訣別が、アポリシヨニストとしての彼等の第一歩であった。⁶ ほかならぬギャリソン自身がこの「転向」の経験

者なのである。したがって、彼等が植民協会の思想から脱却し、これを徹底的に攻撃するようになっていく過程は、彼等自身の奴隷制反対思想の成長としてとらえるべきであり、さらには、独立革命期から一九世紀初期にかけて奴隷制反対運動の主流を占めていた漸進的解放主義 (gradualism) から即時解放主義 (immediatism) への移行の一面を明らかにするものである。本稿は、ギャリソンの植民協会観の変化を追うことによって、この過程を考察しようとするものである。

II

すでに知られているように、ギャリソンが奴隷制反対運動に深くかかわる契機となったのは、ベンジャミン・ランディ (Benjamin Lundy) との出会いであった。ランディは、一八二一年以来合衆国の各地で間歇的に *The Genius of Universal Emancipation* を発刊したり、またフリー・ニグロの植民候補地を求めてハイチ等へ旅行したりして、すでに長年にわたって奴隷制反対運動を続けていた。ギャリソンがランディと初めて会ったのは一八二八年三月のこととて、当時ギャリソンは、ボストンで *The National Philanthropist* という禁酒運動の新聞の編集をしていた。ランディの人柄に深く心をひかれ、その思想に共鳴したギャ

リソンは、同年一〇月、ウァーモント州のベニントンで新しく編集の仕事を任された *The Journal of the Times* の創刊号において、同紙の主要な目的として、「飲酒とそれに伴う悪徳の抑圧」「国内平和の恒久化」とならべて「共和国内の全奴隷の漸進的解放」をあげている。⁷

これより先、八月七日にボストンでランディの講演があり、ギャリソンはその内容を *The Boston Courier* 紙上で詳細に紹介した。その中で植民協会に関する部分をとりだしてみると、協会の活動は称賛に値するものではあるが、それだけで「一定の期間内に奴隷を解放できるであろう」と考えるのは、奴隷人口の増加からみても「まったく当てにならない」から、「それゆえこの悪(注・奴隷制度)を除くために、何か他の計画が考案されねばならない」という簡単なものである。⁸ この頃、おそらくはランディの影響で、奴隷制問題に関するギャリソンの認識はかなり深まっていたようである。一例をあげれば、ランディの意見を批判したマルコム (Howard Malcolm) という牧師に対して、ギャリソンは *Courier* 紙の翌日号で再反論を試みているが、その内容は、高南部の奴隷制度の現状等をかなり正確に把握したものである。⁹ しかし先にあげた植民協会観は、ランディの語ったことを忠実に紹介したものであり、ギャリソン自身はまだ植民協会に対して何ら明確な意見を

持っていないかかったものと思われる。

ランディによって刺激された奴隷制問題への関心は、ギャリソンの内部でしだいに大きなスペースをしめるようになっていき、*The Journal of the Times* 紙上でも、この問題がしばしばとりあげられるようになる。この年十二月五日付の同紙上で、ギャリソンは「より快適な地域への移住を希望する解放奴隷や有色自由人を送送するための手段を提供する」ことを主要な目的として、「二の自由州内の各都市に奴隷制反対協会を設立することをすすめる」「もしも南部の奴隷所有者が、補償なしに彼等の「財産」を手離すことに同意するならば「連邦内の他の地域も、この目的のために公平に資金を分担すべきである」と主張している。¹⁰ これは植民という手段自体の是認であり、植民協会の活動について述べられた意見ではない。それにしてもこの頃彼が奴隷制問題の解決を考える際、植民という手段を高く評価していたことが明らかであり、熱心な植民賛成者であったランディの強い影響がうかがわれる。

ギャリソンが植民協会を支持していた証拠としてしばしば引きあいに出され、ギャリソン自身も後になって何度か触れるのは、翌一八二九年の独立記念日にボストンのパーク・ストリート教会で行なった講演が、植民協会のためのものであったということである。しかしながらこの時の実

際の講演の内容は、合衆国の政治的・道徳的な腐敗墮落に
ついてであり、奴隷制問題に関しては、奴隷の漸進的解放
の主張や北部の種々の偏見の糾弾が中心であって、植民協
会については、「私は市民の皆さんに、すべての州・郡・
タウンに植民協会の支部を設立するにあたり、御援助をい
ただきたく、協会本部への率直で寛大な御後援を切にお願
いするものであります」と、簡単に触れたのみであった。⁽¹⁴⁾
そして彼の講演について *The American Traveller* 紙が不
正確に報じると、すぐさま *Courier* 紙に反論をのせている
が、その中でギャリソンは (注・*Traveller* 紙の) 編集
者は私の講演の要旨が「黒人の植民に関するものであ
つた」と述べている。これは誤りである。私の「四つの命
題」の中には、植民についてはひとつも含まれていな
い」と指摘している。⁽¹⁵⁾

中断していた *Genius* 再刊の仕事に協力してほしいと、
以前からランディに誘われていたギャリソンは、この講演
の成功で自信を深め、ボストンでの職探しをやめて、ラン
ディの提案にしたがうことを決意する。そして八月にはラ
ンディの待つボルティモアに向けて出発するわけである
が、この講演から旅立ちまでの数週間に奴隷解放の問題を
あらためて熟考した結果、彼の解放思想は重大な転換を遂
げる。すなわち、漸進的解放主義から即時解放主義への転

換である。⁽¹⁶⁾ こうしてギャリソンは、いざランディと協力す
る段になって、漸進主義の彼とは明確に立場を異にするこ
とになったが、それは *Genius* 紙に論説等を書く場合、そ
れぞれ署名をして文責を明らかにするということで折りあ
つた。

かくして一八二九年九月二日、新しい *Genius* が発刊さ
れ、ギャリソンはさっそく読者に対し自分の見解が大きく
変わったことを知らせた。

「ボストンでの講演以後、この問題 (注・奴隷制度の打
倒) について熟考した結果、私は、時たりともこの悪を
存続させる正当な理由はひとつもないと確信した。それゆ
え、以下に述べるのが私の命題である。一、奴隷は即時完
全解放される権利を有していること。したがって、彼等を
より長く束縛することは、専制的であると同時に無益であ
る。二、便宜上の問題は権利の問題とは無関係であり、そ
れは、圧制者が彼等の従属者の鎖を断ち切っても差しつか
えない時に言うべきことではないこと。……三、便宜上か
らも、すべての奴隷を明日よりは今日あるいは来年より
は来週一解放する方が賢明であること。……」⁽¹⁷⁾

もし奴隷制度が一瞬の間でも正当と考えられるならば、
何週間、何ヵ月、何年でも正当化されうることになるであ
らう、したがって、漸進的解放主義の主張よりも即時無条

件解放の主張の方が論理的にも倫理的にも正しい、とギャ
リソンは確信した。しかしながら、ここでさらに注目に値
するのは、ギャリソンにとって記念すべきこの宣言の冒頭
で植民協会の再評価がなされていることである。

「まず最初にアメリカ植民協会の計画についてである。
筆者ほど強い関心とまじりけのない満足感をもってリベ
アの植民地を見つめている者は他にいない。私はある時、
この植民地のことを、アフリカの深々と息を吸込む肺であ
り、あたかな血液に満ちた心臓である、と呼んだことが
ある。しかし、植民の事業はきわめて遅々とした不確かな
ものである。それはこの国を完全に救済することはできな
い。……補助物として見るならば、それは奨励されてしか
るべきものであるが、治療策としてはまったく不十分であ
る。……しかし私は、大多数の人々がこの協会の力にあま
りに信頼をおきすぎているのではないかと思う。多くの人
人は、この怪物 (注・奴隷制度) が致命傷を負っている上
いう確信に、自ら騙され安心している。そしてその怪物の
死にはほとんど関心を持たない。……私自身は、多くの黒
人の移送が自発的な寄付や個人的な犠牲によってなしとげ
られるとは思わない。そしてもし私たちが植民協会の運動
にのみ依存するならば、奴隷制度は決して根絶されないだ
らう。」⁽¹⁸⁾

ウィリアム・L・ギャリソンとアメリカ植民協会 (竹本)

また、これに続けてギャリソンは、入植地としてはリベ
リアよりもハイチの方が望ましいとして、その理由に、気
候がより健康的であること、政治が安定していること、距
離的に近いこと、したがって移送の費用が少なくなくて済むこ
と、植民者がよい待遇をうけていることをあげている。ま
た黒人自身も、般にリベリアよりハイチの方を好んでいる
と主張している。だが、そのあとに列挙されている「私の
命題」の四番目では、この国の黒人人口の大多数がこの上
地で生まれたのであり、彼等には住む場所を選択する自由
があること、また彼等を強制的に移住させる権利は自分た
ちにないことが述べられている。⁽¹⁹⁾

ここでギャリソンは植民協会についてかなりまとまった
見解を表明しているが、ここではまだ協会への敵意はおろ
か、協会の性格に対する疑いすら見られない。彼が問題に
しているのは植民という手段自体の効果であって、植民運
動があくまで奴隷制廃止運動の「補助物」にとどまる限り
は、奨励されてしかるべきものであるとしている。リベリ
アよりもハイチを高く評価しているのは、ランディの影響
であろう。だが、植民するもしないも、それを選択するの
はあくまで黒人自身であり、白人には彼等を追出す権利は
ないという主張は、のちの植民協会批判につながるもので
ある。また、この植民協会の再評価が、再刊された *Genius*

紙上での彼の初仕事の冒頭でなされていること自体、重要な暗示を含んでいる。即時解放主義への転換を経験したギヤリソンは、漸進主義のランディと思想的に相容れない立場に身をおくことになったわけであるが、植民運動が漸進主義と密接に結びついている以上、植民運動に關しても、熱心な運動家であるランディとは距離を隔てることになった。先に見たように、ここでは植民協会そのものが問題にされているわけではなく、いわば植民運動の代表者として協会がとりあげられている。したがって、漸進主義植民運動家のランディからの思想的独立、そしておそらくは彼に対する批判が、植民協会に安易に寄りかかる人々への警告という形をとって、間接的にあらわれたと見るべきであらう。

以後ギヤリソンは、ランディとともに *Genius* の編集を続けていく中で、植民協会に対してだに不信感をつのらせていったようである。⁽¹⁷⁾ *Genius* 再刊から半年後、彼の植民協会観は明らかに変化している。すなわち、一八三〇年三月五日付の *Genius* 紙上で彼は、植民協会が一三年間にわずか一三〇〇人の黒人しかリベリアに送っていないのに対し、同じ時期に奴隷人口は五〇万人も増加している事実をあげ、次のように述べている。「ではあるが、その効果のなさがどれほど明白に示されても、植民提唱者の信念

を揺り動かすことができないほど、植民は熱狂的に支持され、協会の活動に盲目的な信頼が寄せられている。……私の不満は、その力がおそろしいほどに過大評価され、その幻惑が、もっと良い活動をすべき人々、すなわち協会員の行動と確信によって水統化されていることである。」

以前から疑問視されていた植民の有効性が、ここでより明確な形で問題にされているわけであるが、重要なのはこれに続く次の言葉である。「さらに私が不満に思うことは、これらの会員が、その地位の高さや影響力の強さからして、奴隷制度の極悪性をあほき、その打倒に積極的力を出してしかるべきであるのに、彼等が奴隷制度の問題に關して固く唇を閉ざしていることである。」⁽¹⁸⁾

これまで植民協会を論じる際には、もっぱらその効果を問いつけてきたギヤリソンが、口調はまだ控え目であるにしても、ここで初めて協会の奴隷制度に対する曖昧な態度を指摘している。言いかえれば、奴隷制度の打倒のために、植民協会がどれほど有効であるのかという疑問から、協会は本当に奴隷制度の打倒を目ざしているのかという、協会の性格そのものについての疑問に変わりつつあるのが看取されるのである。

その後ギヤリソンは、奴隷貿易に携わっていたフランシス・トッド (Francis Todd) という商人に対する個人攻

撃が災いして、一八三〇年の四月から六月にかけて投獄される彼日に陥り、*Genius* も財政難のため刊行できなくなる。しかし奴隷制反対運動にそそぐギヤリソンの熱意は少しも衰えず、ランディと別れた彼は、同年の秋、北部各地で講演を行ないつつ、*The Liberator* 発刊への準備を進めていった。十月十六日のボストンでの講演では、彼は *Genius* 再刊第一号以来何度も繰返してきた即時解放主義の主張を述べ、さらに植民協会についてはそれまでの意見を撤回し、協会に反対する立場を明らかにした。この講演を聴いて感銘をうけ、ギヤリソンの協力者となったサミュエル・メイ (Samuel J. May) は次のように回想している。

「彼 (注・ギヤリソン) は、最近まで表明していた植民運動に対する熱意を深く後悔し、恥じていると述べることから始めた。それは知識の伴わない熱意であった、と彼は告白した。彼は、南部の代理人たちによって自由州全体に熱心に伝えられてきた植民計画の企図と性格についての虚説に欺かれていた。マリーランド州に数ヶ月住んでいた間に、彼はすっかり目を覚ました。その地で彼は、創設者の企図と南部でこの計画にかかわっている人々の特別な意図が、奴隷所有社会における不穏な要素である全有色自由人をこの国から排除し、それによって奴隷をより容易に従属させようとするところにあると気がついた。彼は……植

ウィリアム・L・ギヤリソンとアメリカ植民協会 (竹本)

民の計画は、この制度 (注・奴隷制度) を恒久化するため
に考案されたものであり、それに適合しており、アメリカ
の奴隷制度の悪を強化するものであって、それゆえ自由を
愛する者や人間愛の友人が後援するにはまったく値しない
と非難した。」⁽¹⁹⁾

ここに至って、植民協会の性格についてのギヤリソンの
疑念は、協会が奴隷制度の廃止を目的としていないばかり
か、むしろ奴隷制度をより強化するものであるという認識
へと完全に変化している。こうして植民協会を奴隷制反対
運動の敵対者として位置づけた彼は、このボストンでの講
演にかぎらず、北部の各地で即時解放主義を説いてまわる
と同時に、植民協会に対する戦いも開始した。たとえば、
ニューヘイヴンのある植民提唱者との議論について、彼
は、「私は神学博士のレナード・ベロン師 (Rev. Leonard
Beacon) と長時間にわたって対談し、アメリカ植民協
会の功罪について熱心に論じました。彼は協会の並はず
れた擁護者なのです。私は彼の才能に感服しましたが、
同時に彼の詭弁に満ちた論法にも強い印象をうけました。」
と回想している。⁽²⁰⁾

一八三一年一月一日、*The Liberator* が発刊された。ギ
ヤリソンはその創刊号で、再度一八二九年の独立記念日の
パーク・ストリート教会における講演に触れ、漸進的解放

主義を主張したことを後悔しているが、ここでは植民協会については言及されていない。しかしすぐ次の号で彼は、「アメリカ植民協会の原理は誤っており、その計画は無効である」と非難し、また「*Liberator* 紙上で今後その主張を徹底的に調べる」ことを読者に約束している。以後、ギヤリソンの植民協会批判は激しさを増す一方で、協力者のメイも、「私は植民協会に対するあなたの反対意見に歩調を合わせることはできません。あなたは行き過ぎました。あなたの言葉は辛辣すぎますし、あなたの非難はあまりに見境のないものです。私は、あなたがもうこの運動を大いに傷つけてしまったのではないかと心配です」と言うほどであった。

一八三二年七月、ギヤリソンは *Liberator* 紙上で、植民協会についての小冊子を刊行する予定があることを発表し、自信に満ちた態度で次のように述べた。「私は、正直さと思慮分別と慈悲心と誠実さについての私の評判を、この小冊子に賭けることをためらわない。もし私が、植民の精神が心を持たず、知力を持たず、盲目で、不自然で、偽善的で、冷酷で、不正な敵のようなものであることを証明しないとすれば、その時は、証明できるものなど何ひとつないだろう。」²³

こうしてしだいに強まっていった植民協会に対する敵意。会批判の意図を持ってはいなかった。ところがその仕事に取りかかるやいなや、彼は驚くべき発見をしたのであった。

「私は何よりも先に、その基本的なものすなわち *African Repository* と協会の年次報告書に向かった。私にとって、理性に反していると同時に、人間性に敵対していると思われるさまざまな意見を発見するのに、そう長くはかからなかった。私はヘーヅからヘーヅへと、初めは当惑しつつ、それから驚きながら、そしてしまいに怒りをもって熟読した。私が見出すことのできたものといえば、罪深い言いわけと、致命的な譲歩と、空しい期待と、誇張された発言と、悪意のこもった表現と、明白な矛盾と、むきだし恐怖と、あてにならない請合いと、假借ない偏見と、非キリスト教的非難だけであった。」²⁴

それから彼は、植民協会の各支部の刊行物を読んだり、著名な植民提唱者の意見に耳を傾けたりしてみたが、結果は同じで、「この協会の反キリスト教的・反共和主義的性格は、私にとって真昼の太陽の輝きよりも明るくはつきりとしたものであった」という結論に達した。そこで彼は、以前の彼自身のように植民協会の「危険な傾向」に気づかず、それが奴隷解放や、フリー・ニグロの境遇の改善、アフリカのキリスト教化などのために計画されたものであ

ウリアム・シ・ギヤリソンとアメリカ植民協会(竹本)

は、予告通りその後約一年を経て、一八三二年六月、二三八ページの「アフリカ植民に関する見解」(*Thoughts on African Colonization*)に結晶する。そこで、植民協会についてのギヤリソンの意見の集大成ともいえるこの著作の内容を次に見てみることにする。

III

アフリカ植民に関する見解の内容を考察する前に、まずその序文に注目したい。その中でギヤリソンは、植民協会を支持していた頃の自分自身をふりかえって、次のように述べている。

以前私は、その効力については常に疑いを抱いていたものの、植民協会を称賛すべき団体であると考えていた。この考えは、私が絶対の信頼をおいていた人々によって、私の中に形づくられたものであった。これは確かに、私自身のいかなる調査や知識にも基いたものではなかった。というのも、当時の私は、協会の年次報告も機関誌 *African Repository* も、ヘーヅも熟読したことがなかったのである。私の賛成意見は、軽信と無知の産物であった。²⁴

そして彼が語るところによれば、植民協会の刊行物に目を通すことによって協会の性格を確かめようとはじめてた時も「協会に好意的な先入見」を持ち続けており、まだ協

るといふ、協会の北部向けの宣伝文句をそのまま信じて疑わない北部人の目を覚ますために、植民協会批判を開始したのであった。

以上の経過について、ギヤリソンの言葉をそのままうけとることはできない。一例をあげれば、彼は植民協会に対する敵意なしに *African Repository* を読んでみたと述べているが、彼がこの機関誌を全巻揃えて入手したのは一八三二年の十一月のことである。すでに見たように植民協会批判は *Liberator* 発刊以前から行なっているのであるから、この機関誌を入手し、熟読したのは、時期的に見ても「アフリカ植民に関する見解」を書くための準備作業であったと考えられる。したがって、これらの刊行物を読んで初めて初めて植民協会の性格を理解したとは思われない。先に述べたように、ギヤリソンの植民協会観は徐々に変化していったものであり、特に *Genius* 時代に周囲の人々から影響をうけたと考えるのが妥当であろう。先にあげたメイの回想中の「メリーランド州に数月月任んでいた間に、彼はすっかり目を覚ました」という一節も、これを裏づけるものである。

次に「アフリカ植民に関する見解」の内容を見てみる

と、これは大きく二つの部分に分けられ、第一部では、○項目にわたって植民協会が批判されている。すなわち、

植民協会は、

- 1) 奴隸制度に反対しないことを誓っている
 - 2) 奴隸制度と奴隸所有者を弁護している
 - 3) 奴隸を財産として認めている
 - 4) 奴隸の価値を増大させている
 - 5) 即時解放に反対している
 - 6) 恐怖と利己心に育込まれたものである
 - 7) 黒人の完全な国外排除を目ざしている
 - 8) フリー・ニグロを中傷するものである
 - 9) この国における黒人の向上の可能性を否定している
 - 10) 国民を欺き、誤った方向に導くものである
- の二の点である。³⁰⁾そして、これらの項目ごとに植民協会の年次報告や機関誌、各支部の刊行物などの中の発言から、具体的な証拠を拾い集めて列挙するという、きわめて実証的な作業を行なっている。そしてさらに、これらの諸点にそれぞれ手厳しいコメントを加えているわけである。
- 先にあげた一〇項目を強いて分類すれば、①②③は、植民協会が奴隸制度に反対するどころか、むしろこれを容認し、奴隸所有者を利するもので、奴隸制度のより安全な維持につながるものであることの指摘であり、④⑤⑥は、植民協会の意図が黒人の利益をはかることにあるのではなく、逆に反黒人的な思想に基いていることを示したもので

ある。そして10は、こうした性格を持った植民協会が、全黒人をアフリカへ送ると明言するような、非現実的な計画の宣伝をもって人々を欺いていることを指摘している。

彼は、植民を支持するひとりひとりの人間を敵にまわしたわけではない。私は、協会の設立を企てた人々の動機を問うことにとどまっただけではない。彼等のうちの何人かは、疑いもなく、わが国の有色人の幸福を促進するといふ慈善的な願望に動かされたのであり、決して抑圧に賛成しようなどという意図を持っているはずはなかった。³¹⁾

「私は、協会のエイジェントたちが、真実を誤らせようと企んでいるとか、大衆の軽信に故意につけこんでいるとかいって告発する気は毛頭ない。彼等のうちの何人かはおそらくは全員が誠実で廉潔な人々である。」³²⁾しかしながら、問題は動機の良い悪いや誠実さではなかった。……しかし、私の意見によれば、彼等はタルソンのサウロを支配したのと同じ妄想によって働いている。「すなわち、黒人を見知らぬ土地へと迫害しているのに、自分たちは神への奉仕をしているのだと信じているのである。」³³⁾彼等は自分自身が感わされたが、他の人々を感わす手伝いをしていいる。彼等の視覚は不完全である。そして「もし盲人が盲人を導くなら、彼等はともに同じ穴に落ちこむであらう。」³⁴⁾

ギヤリソン自身が以前は植民協会に賛成していたことを考えれば、自己を正当化するためにも、このように協会支持者をあくまで「感わされ」ている者と呼ぶことは当然である。植民協会の真の性格を見抜いてしまえば、奴隸制度に反対する人々が協会を支持することはありえないと確信したギヤリソンにとって、二三八ページを費して果たそうとした目的は、ただこの「幻惑」(彼は delusion あるいは delude という言葉を何度も使っている)を人々から取り払うことであつた。³⁵⁾奴隸制度の「罪悪」は目に見えるわかりやすいものであつた。だが、植民協会の「罪悪」は、それが慈善の衣をまとって人々を欺くものであつたために、より一層陰険で危険なものであつた。本稿の冒頭にあげたギヤリソンの手紙の一節の、まるで奴隸制度と植民協会とを同一視しているかのような言葉からも推察できる激しく徹底した植民協会批判は、まさにこのゆえであつた。したがって、*Liberator* の発刊で即時解放思想の宣伝手段を確立し、ニューイングランド奴隸制反対協会の設立で運動の組織を整えたギヤリソンの次の仕事は、『アフリカ植民に關する見解』による植民協会打倒であつたことは、決して偶然ではなかつた。

『アフリカ植民に關する見解』の第二部には、植民協会に対するフリー・ニグロ自身の、主として集団的な規模で

の反対声明が数多く集められていて、植民協会の活動の對象となるべきフリー・ニグロ自身が、協会を批判的な目で見ていたことを示している。

「アメリカ植民協会の設立以来現在に至るまで、有色自由人は、公けに繰返し自分たちの意見を表明してきた。彼等は、自分たちの排除に關するあらゆる提案を、怒りをもって拒否している。植民を提唱している人々は、黒人の心の中に存在するこのアフリカ計画への敵意の原因は私であつた、*Liberator* が発刊されるまでは彼等は好意的であつたのだと精神的にふれまわつてきた。この話はまったくの無知に基いている。私は真面目に、確信をもって次のことを断言する。すなわち、私は一ダースほどの人さえ転向させていた。その決定的な理由は、まさに転向など必要なかつたということである。有色自由人が私自身の意見を知り、いかになるはるか以前に、私は彼等の意見をよく知つていたのである。」(注・傍点は筆者。)

以上の言葉は、一見したところ植民協会批判における黒人の先駆性を称えているように見えるが、その最後の一節はきわめて暗示に富んでいる。ギヤリソンが植民協会の賛成者から反対者になつていく過程で、黒人が大きな影響を及ぼしたと考える研究者は少なくない。ギヤリソンの詳細な伝記を著わしたウェンデル・ギヤリソン (Wendell

P. Garrison) とフランシス・ギヤリソン (Francis J. Garrison) は、「協会の危険な性格と傾向、そして奴隷所有者が……本能的に、常に危険の源であると見なしている有色自由人を追放することによって、奴隷制度を強化しようという協会の目的を最初に彼(注・ギヤリソン)に指摘したのは、ボルティモアの何人かの黒人の友人であった」と述べているし、また、ウィリアム・カツツ (William L. Katz) は、「アメリカのニグロをアフリカに送るという考えを拒絶することをギヤリソンに確信させるのもっとも強い影響を及ぼしたのは、黒人の富裕な製帆者であり、発明家であり、またフイラデロフィア社会の指導者のひとりであったジェームズ・フォートン (James Forten) であった。また、おそらくフォートンは、ギヤリソンが彼の著作の重要な部分を構成するニグロの反植民の文書を集めるのに助力したのである」と述べている。また、ベンジャミン・クォーレス (Benjamin Quarles) も、「ある程度は、ギヤリソンがしだいにニグロたちの意見に精通するようになった結果として、彼は植民に関する自分の立場をひるがえし、彼等の意見に従った」として、ルイス・タッパン (Lewis Tappan) の「ギヤリソンやその他の人々を協会への反対に最初に導いたのは、排除計画に対する彼等の団結した不屈の反対であった」とい

う言葉を引用している。いずれもギヤリソン自身の言葉による直接的な証拠に支えられているわけではなく、実際に誰がギヤリソンに影響を与えたかについても意見は一致していない。しかし白人アポリシヨニストの中ではフリー・ニグロと非常に親しい関係を保っていたギヤリソンが、彼等の意見に耳を傾けた可能性は十分考えられる。とすれば、先に引用したギヤリソンの「有色自由人が私自身の意見を知るようになるはるか以前に、私は彼等の意見をよく知っていたのである」という言葉は、黒人の植民協会反対の意見に接しながら、彼自身はなかなか協会の思想から脱却できなかったことを暗示しているし、さらには、ギヤリソン自身が意識していたかどうかは別として、反植民協会思想の形成の段階で黒人からうけた恩恵を、このような婉曲な言葉でしか表現できなかったところに、白人アポリシヨニストとしての彼の限界があらわれているといえよう。

IV

すでに見たように、植民協会の本質を見抜いた後のギヤリソンの協会批判は徹底したものであったが、そこに至るまでの過程はかならずしもすっきりとしたものではない。いくつかの問題を含んでいる。

一般に黒人の植民という考えは、漸進的解放主義の思想

と密接に結びついたものとされているし、実際に初期奴隷制反対運動、すなわち漸進的解放主義が主流を始めていた時代には、植民を伴った奴隷解放案はめずらしいものではなかった。ジェラルド・ソリン (Gerald Sorin) は、一八三〇年代以降のアポリシヨニズム、すなわち即時解放主義の起源について、黒人自身の運動の活発化、一八二〇年代から三〇年代にかけての「第二次大覚醒」(The Second Great Awakening) と呼ばれるキリスト教復興運動、英国の奴隷制反対運動の影響などとともに、植民協会との訣別を含む漸進的解放主義の克服をその重要な要因のひとつとしている。しかしながら、即時解放主義への転換を公けに宣言したあとでさえ、ギヤリソンが植民協会を完全に否定するにはしばらく時間を要した。英国と違って、本国内に奴隷制ブランチションを有し、フリー・ニグロの存在が奴隷解放の大きな障害と考えられていた合衆国では、ある種の即時解放主義と植民との結びつきさえ見られたのである。

だが、ひとたび植民協会の性格を看破すると、ギヤリソンは植民協会をいわばひとつの悪例として利用しつつ、これを攻撃する中で即時解放主義の思想を深め、広めていくことができた。彼は植民協会を批判しながら、同時に植民という手段自体に含まれる誤り、言いかえれば漸進的解放

主義の誤りをも指摘した。

「私は、植民運動をしている人々が奴隷制度を悪 (evil) と認めていることを知っている。しかしそれはこの国に負わされてきた悪であり、ちょうど疫病や飢餓の流行についてと同じように、その存在について私たちが責めを負ういわれないものである。私(注)が不満に思うのは、彼等が奴隷制度をひとつの悪(注)不幸(注)前世代によって私たちに負わされた災難として表現することで満足しており、強硬、冷酷、抑圧、そして海賊行為を含む個人的な罪 (crime) と考えていないことである。協会の人気はその長所ゆえではない。それは、あまりに長い間黒い皮膚に対して抱かれてきた、あの非キリスト教的偏見に完全に適合しているためである。」

つまりギヤリソンは、奴隷を所有すること自体に対する攻撃よりも人種問題の解決を優先させること、しかも黒人の追放という姑息な誤った手段である植民に依存することを否定した。そして、奴隷所有者であることの「罪」を自覚し、それを一刻も早く贖うことこそが唯一の正しい解決策であることを指摘したのである。問題はフリー・ニグロの存在などではなく、奴隷制度自体の是非であり、人種的偏見の是非であった。こうして植民協会が完全に否定された時、奴隷制廃止運動におけるギヤリソンの根本思想が

確立した。すなわち、植民協会への批判を本質として、ギヤリソンは漸進的解放主義から真の即時解放主義へと飛躍した、と言いうる。

「問われなければならぬことは、アフリカの氣候が健康によいかどうか、植民者の死亡率があまりに高いのではないのかとか、入植地が繁栄しているかどうかとか、わが国の全有色人の移住に三〇年かかるのか、あるいは三〇〇年かかるのかとか、奴隷が国外追放を条件として解放されてきたのかどうかというのではない。そうではなくて、協会の原則と原理が福音書の教義と原理に合致するものであるかどうか、奴隷所有者が、彼等の奴隷の正当な所有者であるのかどうか、いまだ奴隷制度を廃止し、いままでも不正に扱われ、不当な恥辱におおわれてきた有色人を、兄弟かつ同胞として認めることが、国民の神聖なる義務ではないのかどうか、ということである。これがまさしく問題であり、また唯一の問題なのである。」⁴⁶⁾

註

- (1) Merrion L. Dillon, "The Abolitionists: A Decade of Historiography, 1950—1969," *Journal of Southern History*, 35 (1969), pp. 708—712.
- (2) Garrison to Henry E. Penson July 21, 1832, Walter M. Merrill ed., *The Letters of William Lloyd Garrison*, vol. I (Cambridge, Mass., 1971) (以下「Letters」略す)。

- (1) *Lloyd Garrison 1803—1879, The Story of His Life Told by His Children*, vol. I (Boston & New York, 1894) (以下「Life」略す) p. 103.
- (2) Garrison to the editor of *The Boston Courier* (August 11, 1838), *Letters*, p. 61.
- (3) Garrison to the editor of *The Boston Courier* (August 12, 1838), *Ibid.*, pp. 66—68.
- (4) *Life*, pp. 107—108.
- (5) *Ibid.*, p. 137. *Life* の著者は、ギヤリソンがリスミア植民地を称賛したと述べているが、同書の引用部分にはどうした言葉は含まれていない。
- (6) Garrison to the editor of *The Boston Courier* (July 9, 1839), *Letters*, pp. 84—86.
- (7) ギヤリソンが即時解放主義の主張をどこから採用したか不明である。Walter M. Merrill, *Agains Wind And Tide, A Biography of Wm. Lloyd Garrison* (Cambridge, Mass., 1963), reprinted in 1971, p. 30. サマヤナ・ナム (Russel B. Nye) は、「しかしボストンでウィリアム・ナム (William Goodell) の会話で、ギヤリソンは漸進的解放即時解放の問題を徹底的に論じた一書としてボストンから出発する前に、彼は変心した」と述べている。Russel B. Nye, *William Lloyd Garrison and the Humanitarian Reformers* (Boston, 1955) p. 24.
- (8) *Life*, p. 143.
- (9) *Ibid.*, pp. 142—143.
- (10) *Ibid.*, pp. 143—144.

ウィリアム・L・ギヤリソンとアメリカ植民協会(竹本)

p. 126.

- (3) 植民協会の研究書としては、Philip J. Staudemann, *The African Colonization Movement, 1816—65* (New York, 1961), Early L. Fox, *The American Colonization Society, 1817—40* (Baltimore, 1919), 研究論文には、Henry N. Sherwood, "The Formation of the American Colonization Society," *Journal of Negro History*, II (1917), pp. 209—228, Charles I. Foster, "The Colonization of Free Negroes in Liberia, 1816—35," *Journal of Negro History*, XXXV (1955), pp. 41—66 などがある。また、わが国のものである、福本保信「アメリカ植民協会—アメリカ黒人をアメリカへ送還するための組織」、『西南学院大学文理論集』一、一、(一九七〇)がある。

- (4) 一七九〇年から一八〇〇年までの間に、黒人全体の増加率は三三・三%であるのに対して、フリー・ソールの増加率は八二・二%、一八〇〇年から一八一〇年までの間には、前者が三七・五%、後者が七一・九%である。U.S. Bureau of Census, *Negro Population 1790—1916*, Washington, 1918, reprinted in New York, 1968, p. 57, Table 6 より算出。

- (5) Staudemann, *op. cit.*, Appendix.
- (6) ジェット・スミス (Gerrit Smith) ノート・ブックス、James G. Birney ノート・ブックス、カール・ウェルド、など。特にカーニエ・スミスは熱心な協会活動家であった。
- (7) Wendell P. Garrison & Francis J. Garrison, *William*

- (17) ランデスは、植民運動には熱心であったが、植民協会に対しては、はやくも一八二二年頃には、同協会が人種的偏見を基礎としており、また奴隷制度に反対していないという理由で、あまり信頼をおいていなかったようである。David B. Davis, "The Emergence of Immediatism in Irish and American Antislavery Thought," *The Mississippi Valley Historical Review*, XLIX (1962), p. 225.
- (18) *Life*, p. 149.
- (19) *Ibid.*, pp. 213—214.
- (20) *Ibid.*, p. 204.
- (21) *Ibid.*, p. 206.
- (22) *Ibid.*, pp. 261—262. 当時、ナイは、また植民協会の会員であった。
- (23) *Ibid.*, p. 262.
- (24) William L. Garrison, *Thoughts on African Colonization* (Boston, 1832, reprinted in New York, 1968) (以下「Thoughts」略す) part I, p. 3.
- (25) *Ibid.*, part I, p. 4.
- (26) *Ibid.*, part I, pp. 4—5.
- (27) *Ibid.*, part I, p. 5.
- (28) *Ibid.*, part I, p. 5.
- (29) Garrison to Henry E. Penson (November 12, 1831, *Letters*, p. 140).
- (30) *Thoughts*, part I, pp. 39—140, 各章のタイトルより。
- (31) *Ibid.*, part I, p. 39.
- (32) *Ibid.*, part I, p. 28.

- (38) *Ibid.*, part I, p. 17. なお、文中の「タットソンのサウロ」とは、俳優ウィリアム・タットソンの名。
- (39) *Ibid.*, part I, p. 17.
- (40) この幻想の重大さには気がつくが、私はそれを削除しようという抗いがたい衝動に駆り立てられた。*Ibid.*, part I, p. 17.
- (41) *Ibid.*, part II, p. 8.
- (42) *Life*, pp. 147—148.
- (43) *Thoughts*, Introduction by William L. Katz, p. 1.
- (44) Benjamin Quarles, *Black Abolitionists* (New York, 1969) p. 19. また、マセラルド・ソローン (Gerald Sorn) も植民協会反対における黒人の役割を強調し、タットソンの同じ言葉を引用している。Gerald Sorn, *Abolitionism, A New Perspective* (New York, 1972) p. 103.
- (45) 植民協会以前の植民案については、Henry N. Peter, *word: "Early Negro Derivation Profits," Mississippi Valley Historical Review*, II, 1916, pp. 47—52 がある。
- (46) *Sorn, op. cit.*, p. 51.
- (47) Davis, *op. cit.*, pp. 292—295.
- (48) *Thoughts*, part I, p. 54.
- (49) *Ibid.*, part I, p. 20.
- (50) *Ibid.*, part I, p. 21.
- (51) *Ibid.*, preface, p. 5.

〔三〕頁下段より続く。

以上の文章は昭和五十二年度卒業論文、「陳玉成—安慶失陥より死まで—」の縮小版である。論文では前半に太平天国軍の軍事行動を分析したのであるが、これを全面的に削除し、陳玉成の人物評価に的をしぼった。

このような場に掲げるにははなはだ不適切な私論ではあるが、私の語りたかった事は、一人の人間の歴史の中に於ける生き方、とでもいべき事であった、拙い文章の中で、これをいくらかでも言い得ているなら幸いである。

〔三三頁附図説明〕

〔立教大学史学科卒〕

図一 一八六〇年

第二次江南大營撃破成功す。李秀成は江南大營の食糧路を断つため杭州に進軍。五月、太平軍は総力をあげ天京を救援し、勝利をおさめる。天京の包囲は東部がおさえられていなかっただためと考えた太平軍は、東征を企てる。李秀成が兵を率いて上海、蘇州方面へ向かい、陳玉成もこれに協力す。

図二 一八六一年

第二次西征失敗す。湖北省武漢を二方面(李秀成—南路、陳玉成—北路から)攻撃し、安慶包囲を解く予定であったが、李秀成が義民吸収に手間取ったためと、陳玉成が安慶の急を聞いて帰ったため失敗におわる。